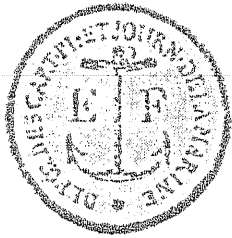


ラペルーズ世界周航記

日本近海編

小林忠雄 編訳



白水社



ラペルーズ肖像（パリ海洋博物館所蔵）
司令官の制服を着用した像で、1793年タルデューの原画にもとづいて描いたもの。フランスでもっとも普及している。

フランス人、L・A・ド・ブーゲンビルについては、その世界一周航海の途上、一七六八年に発見したソロモン諸島のブーゲンビル島が、第二次世界大戦の折、日米両国の激戦地となったため、その島名が日本人によく知られたり、その関連から、発見者ブーゲンビルの名前も一部の人には知られるまでになった。

ジャン・フランソワ・ガロー・ド・ラペルーズは、この三人の航海家のなかで、ただ一人、日本の近海を航海し、日本人が明治時代になって宗谷海峡⁽²⁾と呼んだ海峡を、ヨーロッパ人として最初に通過した。そのため現在でも外国版の世界地図には、ラペルーズ海峡⁽³⁾としてその名が残されていないながら、日本では名前も業績も余り知られていないのは残念である。

彼は一七四一年フランスに生まれ、海軍士官となった後、国王ルイ十六世の命を受け、二隻のフリゲート艦をひきいて、太平洋地域の地理学上の探検および、交易と自然科学の調査研究の目的をもって、一七八五年八月一日、フランスのブレスト港を出帆したのである。

ラペルーズはブレスト港を出帆してより、オーストラリア東海岸に到着するまでの二年六か月間の航海について、欠かさず日記と航海データを記録していた。

ラペルーズ一行の行方不明にもかかわらず、幸いにも一七八七年九月までの報告は、カムチャツカ半島で下船したロシア語通訳バルテレミー・レセップス⁽⁵⁾によって、ヴェルサイユ宮殿のルイ十六世のもとに届けられた。そしてその続編にあたるオーストラリアに着くまでの報告は、イギリス人に託送されてフランスに無事届けられた。

このラペルーズが本国に送った彼の航海日記は、彼自身の肉筆の写しであって、今なおこれはフランス国内の古文書館や博物館に分散して保存されている。しかしある部分は欠落している。

この原稿がパリに到着した翌一七八九年、フランス革命が勃発し、革命政府の国民議会が一七九一年四月二

VOYAGE DE LA PÉROUSE

AUTOUR DU MONDE,

PUBLIÉ

CONFORMÉMENT AU DÉCRET DU 22 AVRIL 1791,

ET RÉDIGÉ

PAR M. L. A. MILET-MUREAU,

Général de Brigade dans le Corps du Génie, Directeur des Fortifications,
Ex-Constituant, Membre de plusieurs Sociétés littéraires de Paris.

TOME PREMIER.

A PARIS,
DE L'IMPRIMERIE DE LA RÉPUBLIQUE.

A N V. (1797)

『ラペルーズ世界周航記』原書の扉

ルイ十六世はこの探検航海の學術調査を重要視して、天文学、地理学、航海術、物理学、博物学の分野のすぐれた学者、ならびにスケッチ画家を同行させた。これらの人々は後ほどこの周航記のなかで、その氏名が度々出るようになるので、次に紹介しておこう。

ブノール号搭乗

モネロン (Monneron) 工兵大尉、主席技師

ベルニゼ (Bernizet) 地理学者

ロラン (Rollin) 外科医長

ダジュレ (Dagelet) 科学アカデミー会員、陸軍教授、天文学者

ラマン (Lamaron) 物理、鉱物、氣象学者

モンジエ神父 (Tabbé Mongès) 同行司祭、物理学者

ヴァンシィ (Vancy) 肖像、風景画家

プレヴォー (Prevost) 植物スケッチ画家

コリニョン (Collignon) 植物学者、園芸技師

グリー (Guery) 時計技師

アストロラプ号搭乗

モンジエ (Monge) 陸軍教授、天文学者

マルティニエール (Martinère) 医師、植物学者

デュフレソン (Dufresne) 博物学者

ルスヴール神父 (père Receveur) フランシスコ派修道士、神父、博物学者

第一章（原著第十六章）

一七八七年四月フィリピン、キャビテ港を出帆す 台湾海峡の中央に浅瀬を発見す、その緯度・経度 台湾の旧オランダ要塞の沖合六海里に停泊し、翌日出帆す 湖湖列島の詳細 紅頭嶼（蘭嶼）の偵察 琉球王国の与那国島沖合を通過す 日本の海域に入る 中国の沿岸を巡航す 濟州島と韓国の詳細 鬱陵島の発見とその緯度・経度

ラベルーズとその一行は、これよりフィリピンのマニラ湾を出帆し、彼の主要な任務の一つである、シベリア大陸の東端、すなわち日本の北方海域にむかって探検航海の緒についた。当時、この地は地理学上の空白地帯であり、キャプテン・クックも未調査の地域であった。

これより彼の世界周航記のなかの、日本近海編を原文に忠実に翻訳し、今より二〇〇年前のこの地方の記録を紹介する次第であるが、その前に、彼が本国を出帆し、このフィリピンに到着するまでの航海の概略を記述しなければならぬ。

本州の南西の岬に向けて航路をとるべきだと判断した。この二個所が、日本沿岸の周辺を、これまで世界の地理学者が推定するにすぎなかった不確定個所を解決するはずであった。

五月二七日。針路を東にとる信号をおくった。まもなく、どの海図にも記載されていない島を北北東に、朝鮮沿岸より六〇海里はなれた地点に発見した。

この島に接近をはかったが、島の位置は風上にあつた。しかし幸運にも夜間風向きが変わつたので、夜明けとともに、この島の調査に向かうべく針路をとつた。そしてこの島の発見者である天文学者ダジュレ⁽²⁹⁾氏の名をとり、ダジュレ島 (Die Dageler 現在名、つりよち 鬱陵島) と命名した。

この島の周囲は九海里あり、島の沖合を一海里はなれて一周したが、測鉛はどこでも海底にとどかなかつた。私は陸地までの水深をはかるため、ブウタン大尉⁽³⁰⁾を艇長とするボートを派遣した。

その測深によれば、島より二〇〇メートルはなれ、海岸に波のひろがり始める北緯三七度二五分、東経一九度二分の島の北東の地点では、水深は二〇尋であつた。

島は海に急傾斜しているが、山頂より海岸まで見事な樹木でおおわれている。上陸可能な七個所のせまい砂浜を除くと、島の周囲は垂直に近いむきだしの岩壁で囲まれている。この海岸に純中国式の造船場を発見した。

作業員は間近に我々の軍艦を発見し、当然驚いたようである。作業場より五〇歩ばかりはなれた森のなかに逃げこんだ。この付近には小屋が数棟あるのみで部落も耕地もなかつた。大工達はおそらく六〇海里はなれた朝鮮から、夏期この島に食料品持参で渡来し、船を建造し、これを大陸で売却するのであろう。

この我々の考えはほぼ間違ひなかつた。それは我々が西岬を迂回したとき、岬にへだてられて、我々の接近が見えなかつた他の造船場の作業員が、材木のそばで作業をつづけながら我々に驚いていたからである。そして少しも不安を示さなかつた例外的な二―三人をのぞいて、全員森の中に逃げ去つた。

我々は好意的な行動によって彼らの敵でないことを島民に納得させるため、停泊地をさがしたが、速い潮流によって陸地より遠く流された。

夜が近づいてきた。我々は風下に流されることと、ブウタン大尉を指揮官として派遣したボートとの合流が困難となることを恐れ、大尉の島への上陸の直前に、帰艦を命令する信号を發せざるをえなかつた。

私は潮流により西方にかなりの距離を流されていたアストロラブ号とおちあい、この島の高山にさえぎられて、沖合からの風に安全な島陰で一夜をすごした。

地名・人名索引

ア行

アヴァチャ川 156, 165, 178
 アヴァチャ湾 142, 155, 160, 163, 173, 174, 177, 180, 181
 アジア 71, 146, 151, 153, 170, 177
 アッケイス (厚岸) 71, 134, 136
 アドミラルティ諸島 190
 アナショリット島 191
 アナムカ島 214, 215
 アニアン海峡 146
 アニワ岬 134, 136
 アニワ湾 133, 134, 136
 アメリカ 178
 アメリカ北西部 180
 アメリカ捕鯨船の船長 192
 アラスカ西海岸 40
 アラビア 94
 アルビ 26, 28, 227
 アンジェリス神父 71, 151
 アンソン提督 48
 アンビ 218
 アンボイナ 215, 226
 イヴァシュキン氏 155, 171
 イースター島 34, 40
 イルクーツク 174
 イル・デパン 232
 イル・ド・フランス 18, 24, 186, 187, 226
 インド 177, 216
 インド洋 18, 186, 188, 214

ヴァルパライソ 196
 ヴァンシイ氏 30
 ヴィクトール・ジョセフ・ガロー 26
 ヴェルフネ 158, 164
 ヴォージャ中尉 77, 102, 132, 133
 ヴォルテール 17
 ウシシル島 36
 鬱陵島 (ダジュレ島) 39, 58
 ウナラシュカ岬 151
 ウラジオストック 237
 ウルップ島 36
 エカテリーナ女帝 172
 エゾ (本土) 34, 35, 37, 71, 80, 82, 119, 125, 134, 136, 146, 147, 149, 150, 151, 152, 153, 154
 エタ島 (エトロフ島) 36, 71, 125, 136, 154
 エリザヴェータ女帝 171
 沿海地方 165
 奥エゾ 80, 125, 129, 134, 138, 145, 146, 147, 148, 149, 150, 152, 153, 154
 オシリ 216
 オーストラリア 225
 オーストラリア東海岸 182, 185, 187, 194, 214
 オストログ 174, 175
 オーパンシュ (魚釣島) 52
 オホーツク 155, 156, 158, 167, 170, 171, 173, 181
 オホーツク海 81, 153, 167
 オリボー大佐 188, 191

編訳者略歴
 一九〇七年岡山県に生まれる。
 大阪外国語学校 (現、大阪外国語大学) 仏語部卒業。
 ヌベル・カレドニア鉱業 (株)、野村鉱業 (株)、土肥
 鉱業 (株) に勤務した。
 日仏会館、日本仏学史学会会員。ニューカレドニア
 史学会、ニューカレドニア・ソロモン協会名誉会員。
 著作
 「ニュー・カレドニア島の日本人」(一九八〇年) ヌメ
 ア友の念
 「ラベルズと日本」(日仏会館「日仏文化」No.46)
 現住所 〒一六六 東京都杉並区和田三丁目一八
 電話 〇三三(二)一九六三

ラベルズ世界周航記

——日本近海編——

編訳者

◎

小林

忠雄

忠雄

忠雄

忠雄

忠雄

忠雄

発行者

高橋

高橋

高橋

高橋

高橋

高橋

高橋

高橋

印刷者

山田

山田

山田

山田

山田

山田

山田

山田

発行所

株式会社

白

水

社

隆

孝

雄

雄

東京都千代田区神田小川町三の二四
 電話 営業部 〇三(三)元(七)八二一
 編集部 〇三(三)元(七)八二一
 振替 東京 九一三三三二二八
 郵便番号 一〇一

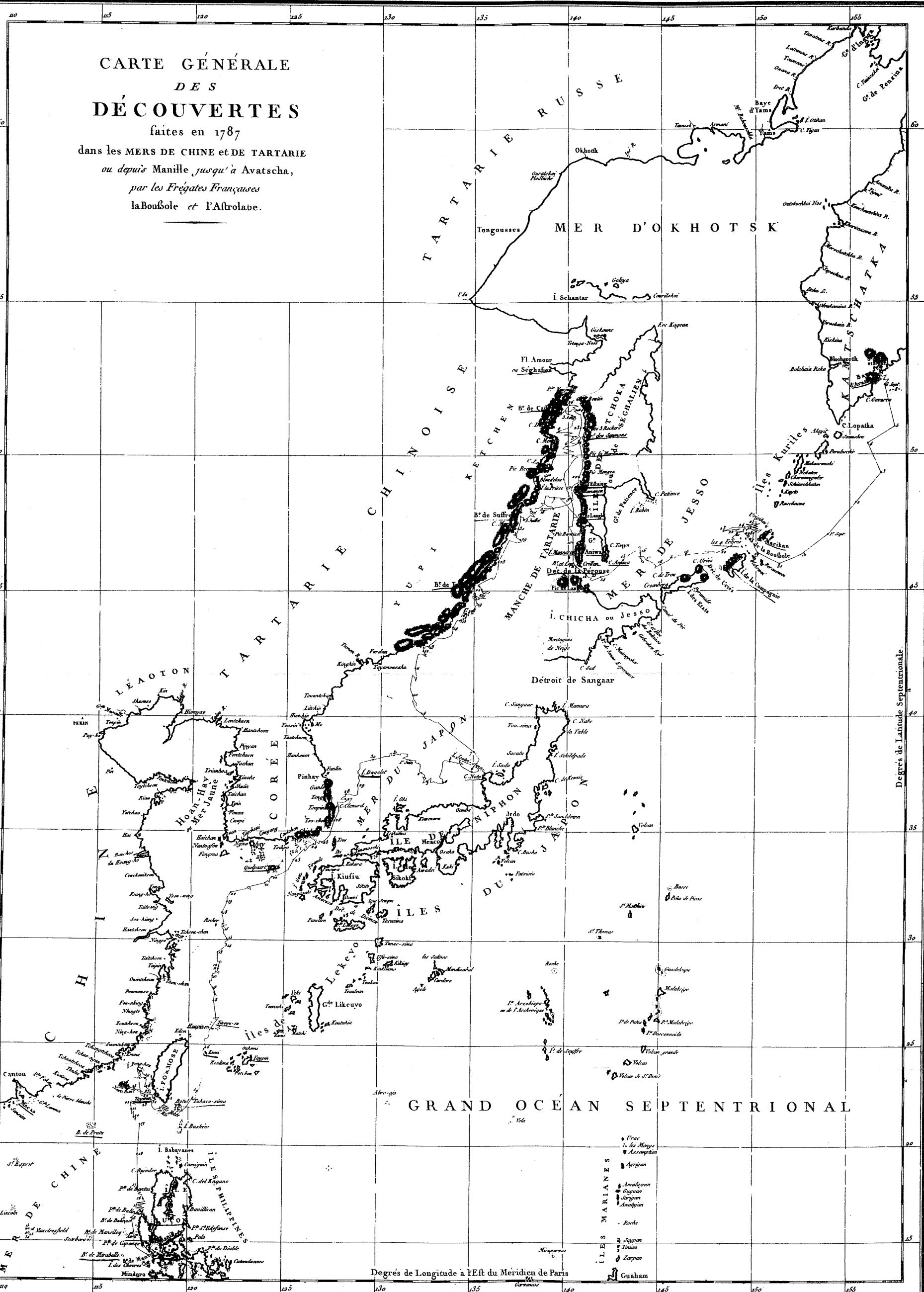
精興社印刷・松岳社製本

ISBN4-560-03010-3

CARTE GÉNÉRALE DES DÉCOUVERTES

faites en 1787

dans les MERS DE CHINE ET DE TARTARIE
ou depuis Manille jusqu'à Avatscha,
par les Frégates Françaises
la Bousole et l'Astrolabe.



GRAND OCEAN SEPTENTRIONAL

Degrés de Longitude à l'Est du Méridien de Paris

Degrés de Latitude Septentrionale.

- Oroc
- les Mangas
- Assumption
- Apurjan
- Anadyr
- Cayuan
- Sargjan
- Anadyr
- Roche
- Sargjan
- Tsin
- Zarp
- Guahan

ラベルルース航海図
マニラより日本海